

<エッセイ>村木正武先生のこと

著者名(日)	藤巻 一真
雑誌名	言語科学研究 : 神田外語大学大学院紀要
巻	4
ページ	2013/05/060:00:00
発行年	1998-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1092/00000317/

村木正武先生のこと

藤巻 一真

村木先生にご指導を頂いてから、早いもので、もう5年になる。先生との思い出は数え切れないほどあるが、その中からいくつか書き綴ってみようと思う。先生との出会いは、私が修士の2年になった春に遡る。創立されたばかりの大学院で、先輩のいないなか、約2年間、故山田洋先生に御指導を頂いた、今よりはまだ、研究の精神と術をあまり身につけていなかった頃のことである。獨協大学から赴任された村木先生に論文を指導して頂くことになった。先生は私の論文の書けなさに、さぞ驚かれたことであろう。

しかし、先生は忍耐強く論文を指導して下さった。やっとの思いで論文を書いて先生に見て頂くと、論文の裏面にたくさんのコメントが書かれて返ってきた。知る人ぞ知るロジカルで厳しいコメントであった。当時は、先生とのお付き合いが浅かったせいもあり、厳しいコメントだと思っていた。同時に何とか、先生に納得して頂けるものを書こうと意気込んだことも覚えている。実は、後で聞いた話だが、学生にしっかりと考えさせるのが目的であったらしい。私は、まんまと先生の術中にはまったわけだが、おかげで、論文を書き進めることが出来た。現在では、先生の厳しいコメントにも慣れ、論文を書いては論理的におかしな点はないか先生に見て頂いている。

話変わって、私が電子メールをするようになったのは、村木先生に「メールをやるらないかい？」と誘われたからである。当時はまだ電子メールがそれほど流行っていなかったもので、少々面倒くさそうに私は思っていたが、仲間が電子メールをやり始め、先生とメールをやりとりしていると聞いて、私も波に乗り遅れまいと電子メールを始めた。始めてみると意外に簡単で、論文のコメントを始め、励ましのお言葉を頂戴した。ただし、メールにおける使用言語は英語のみであった。日本語でメールをお送りすると、‘Why not in English?’などとメールが返ってきた。これは、英語の訓練の為だったと思う。先生のご指導は至る所にあったのだと今になって気づき、先生のご指導の有り難さを感じている。

言語科学研究第4号(1998年)

先生から学んだことは沢山あるが、その中に、言葉を観察することの重要さがある。先生はよく「理論は言葉を切る刀にすぎない。言葉そのものを観察することが大切である。」と仰られた。ともすると、理論に傾きがちな私への戒めであったと思う。それ以来、何度となく、よりデータを盛り込んだものを先生に見て頂いたが、やはり、言語事実の観察が足りないと先生から言われた。今でも先生のお言葉を思い出し研究をするようにしている。もう一つ先生から学んだことは、論文を論理的に、さらには、簡潔明瞭な英語で書くことである。特に、だらだら長い英文を書いていくと、英文を直すようコメントがついて返ってくる。覚えたての粹な言い回しを慣れずに使うと即直される。バランスが悪かったのであろう。やはり、英語自身の力を磨かなければならないと思った。

さて、先生はあまり言葉にせずにものを語られるように思う。先生の言葉はある時突然、深い意味を持って私に語りかけてくる。「師は自分が必要な時に向こうからやって来る」という言葉があるが、自分がその段階にないときは、先生の言葉も無口であるが、自分が成長しその段階に達すると、先生の言葉はその言葉以上に雄弁に語りかけてくれる。先生から頂いたお言葉は、これからも私にとって強い味方である。

更に、先生はよく「論理の人」のように言われるが、実はそうであると同時にまたそれ以上に「慈愛の人」ではないかと思う。先生は、学生のことをととても温かく見守って下さり、時にはあつく語り、時には涙を浮かべ、また時には学生の肩をポンと叩いて「頑張れよ。」と言って下さる。先生は、いつでも、からだ全体に愛が満ちあふれている。これは、私だけでなく先生から教わった者皆が感じていることだと思う。

現在、私も未熟ながら英語を教える立場にあるが、先生から教わったことを忘れずに、先生に一步でも近づくよう努力し、さらに、先生から頂いた学問をする心を大切に育てていきたいと思う。そして、先生から頂いた愛を、私の学生に返していけるよう努力したいと思う。

村木先生、長い間有り難うございました。これからも、健康でご活躍くださるよう私たち一同心よりお祈り申し上げます。